

<講演要旨>

妖怪と比較文化研究 ― 轆轤首を中心に

横山 泰子

日本古来の怪談に深い興味を持った外国人といえば、ラフカディオ・ハーンの名が思い浮かぶ。『狂歌百物語』におさめられた怪奇趣味的な狂歌を英訳したハーンは、その草稿にみずから化け物スケッチを描き添えていた（『小泉八雲秘稿画本 妖魔詩話』博文館新社、2002年 参照）。『妖魔詩話』の中で目にとまるのは、ハーンが三通りに描いていた「轆轤首」の絵である。いずれも、夫人や女中の顔など身近な女性の似顔になっているところが特徴で、首の長い愛嬌ある姿で描かれている。「轆轤首」は彼にとって思い入れの深い妖怪とみえ、有名な著作『怪談』でも「轆轤首」の話を書いている。ただし、こちらの「轆轤首」は首が長い女性の物語ではなく、胴体から頭部を離脱させることのできる家族の物語になっている。ハーンは日本の轆轤首には、「首の長いタイプ」と「頭部が飛行するタイプ」の二種類があり、後者のタイプが中国に由来することを記している。現代人は「轆轤首」というと、首の長い妖怪をイメージするが、かつて日本の「轆轤首」の形状はそれだけではなかった。日本の「轆轤首」の原初的な姿は、中国の「飛頭蛮」に由来する、頭部が飛行するタイプだったのである。

もともと「轆轤首」という名称は、何に由来するのであろうか。先学の轆轤首研究を総合すると、この語は、元の陳孚が安南で「飛頭蛮」と呼ばれていた人々について「頭飛似轆轤」といったことに由来する。『大漢和辞典』によれば、轆轤とは「車井戸の上につけてつるべ縄をかける滑車」である。井戸で水を汲む際、轆轤のはたらきで桶が上がったり下がったりする。この上下方向に運動

する動きと、垂直に立った人体から頭が上に飛ぶ動きを関連づけ、「頭飛似轆轤」の語が生まれたのではなかろうか。中国の『搜神記』や『酉陽雜俎』、さらには『本草綱目』などの文献には、中国の南方には体から頭部を離して飛ばすことのできる民族がいるといった情報が載せられている。中国においては、「飛頭蛮」は頭部を胴体から離脱できるものとしてのイメージを保ち続け、1889年8月26日の『点石齋画報』には「飛頭の民は現存する」という趣旨の報道までなされている。

以上の如き中国の「飛頭蛮」情報は、日本に輸入され、江戸時代にいたってにわかに飛頭伝承が広く行われるようになったのである。が、江戸時代の半ば頃から頭部と胴体が筋のようなものでつながった形で想像されるようになり、やがて頭部と胴体を細長い頸部がつないでいる形になっていった。私は中国的な轆轤首の姿が日本的に変容していく過程を、「飛頭型」から「筋首型」、そして「首長型」への移行としてとらえてみた。そして、頭と胴体を連続した形で表現するようになったのには、日本人が妖怪の特性を絵で表現しようとした際、わかりやすくするため、胴体から頭が離れていく「動線」のようなものをつけたからではないかと考えた。

江戸時代は、大人向けの怪異小説の挿絵や、子ども向けの絵本やおもちゃなど、妖怪の姿形が多様に描かれた時代である。視覚的なメディアによって、本来ははっきりと見ることができないはずの妖怪の姿が、面白い形で表現され、流通していった。子どものための絵本である赤本・青本・黒本や、大人むけの黄表紙などでは、絵が主体となるため、絵で特徴を面白く描きやすい首長型轆轤首が主流になったと考えられる。山東京伝作・喜多川歌麿画の黄表紙『狂言末広栄』では、女性主人公が上方に行った男性を恋い慕うあまり、首だけが彼を追い求めて長く伸びていく。江戸から京の都まで、女性の首が長く伸びることから奇抜な発想がおかしみを誘う。当時の人々はこうした作品に触れることで、笑いとともに首の長い「轆轤首」のイメージを受容していたのである。また、現代人の妖怪イメージは、江戸時代の妖怪画に多大な影響を受けているため、

この時期に描かれた首の長い轆轤首の形が今なお私たちにも馴染み深いものとなったのであろう。

日本の轆轤首の変容については、「近世文化における轆轤首の形状について」(小松和彦編『日本妖怪学大全』小学館、2003年)を書いたので、詳細は拙論にゆずるが、その過程であらためて認識したことは、比較文化的な視点を持つことの重要性である。妖怪は国や地域に根ざしたネイティブなものと思われがちであるが、他の国や文化から「不思議なもの」のイメージが移植されて展開するものでもある。「轆轤首」に限らず、妖怪を研究するにあたっては、日本の独自性を明確にするためにも、他の文化圏との共通点・相違点を意識する必要があると思う。

(本稿は2003年11月2日にICU比較文化研究会主催で行われた講演の要旨です)